

被災者のためにも 政治を変えたい



仮設訪問で、深刻な被災者の状況を聞き

7月14日は一日中強く降り続く雨の中、ボランティアの皆さんの仮設訪問の活動が続きました。

北陸信越地方や関西から駆けつけてくれた方々の奮闘で、仮設住宅に入られている多く

の被災者の皆さんの貴重なご意見や、要求、復興への思いを聞かせていただきました。

農家の方からの支援物資として、朝に収穫したキャベツ150個を、軽四トラックでセンターに届けてくれた富山県高岡市のお二人の女性の方は、その後、ボランティア活動にも参加されました。

「軽四トラックを運転するなんて初めて。高速の運転もあり、怖かった」と話しながら、朝採れの大量のキャベツを運んでくれました。



仮設訪問では、入居され

ている方々からいろいろな話を聞きとることができました。

センターに戻ってからの訪問活動の経験交流の会議で、訪問したボランティアの方々が口々に「被災者に逆に元気をもらった」と話されていていました。「対話をする」と、皆さん最初は「仮設に入れてもらいたい、いろいろ皆さんにもお世話になり、良くしてもらって感謝しています」と、話されませんが、『何かお困り事はありませんか』と声をかけると、仮設生活のいろいろな悩みや、2年後、将来に対する不安、先が見通せないことなどを、重い口を開いて語ってくれます。先を見通せない不安を抱えながら暮らしておられるんだなと感じました」

88歳の方は、「あきらめきれない。家の再建に向けて頑張る」と

「六水市の地域の仮設に入居されている102歳の男性は、訪問介護を受けながら一人で暮らしておられました」

さらに、別の「88歳にな



全壊の家の前に自転車があり、片づけで入られているのでは？

る男性が、『何としても自宅をこの地に再建したい。その思いで頑張る』と話してくれた。この街・この地に寄せる思い、この町を離れたくないとの、強い思いを聞くことができ、震災にあってもくじけない思いを聞いて本当に良かった。

「逆に被災者から元気をもらいました。ボランティアに来て本当によかった。帰って皆さんにもこの思いを伝えて、皆を誘ってまた来たい」など、次々に感想を述べました。

これらの感想に、感想交流会に臨んでいた人たちは目頭を熱くしながら、「88歳の被災者にそう言わせるような政府の対応を変えさせたい」「何としてもこの政治を変えていきたい」と、口々に語っておられました。